

花

晴れた日、いけ花の花材にと、季節の花であるねこ柳を取りに行く。

「なんでこない一本もないんやろ」

日ごろ使いもしない大阪弁でつぶやく。

いけ花を始めるまでは、あまり気にもとめたことなかった山野の草花に、しかも人に教える立場に立ってから、急に目を向け始めてもう何年にもなる。

話は変わるが、私は山登りが好きである。若い時から何回も手術台上がって体のそこを切っている身では、スポーツをやりたくてもやれない。そんな私にとって登山は唯一のスポーツである。はじめのころはただ登ればよかったが、近ごろは、山登りには必ず花ばさみを持って行く。もっともそこが国立公園であったり国定公園であったりする場合は例外である。そのかわり近くの山に登る場合は、弁当は忘れても花ばさみは決して忘れ

後 藤 知 久

(会員・佐伯市中山区)

ずに持って行く。

山へ行くと、季節に関係なく、四季折々の花材が幾らでも自生している。椿の花はどここの山、きぶしは植松から尺間への山道に、ねこ柳なら番匠大橋の橋の下にと、それぞれの所在をちゃんと頭の中に入れて、季節になると必ず出掛けて行く。

ところが、この二三年、折角のお目当ての花が見られなくなった。番匠の大橋(弥生町)の下に、あれほど幾種類もの群生を見せていたねこ柳も、今はもうほとんど見当たらない。大橋の下だけでなく、どこの川の岸に行っても同じ現象を示している。ただ一か所、宇山の堤防には昔のままの群生が見られるが、夏の増水期にかぶつたごみがついていて、花の材料には不向きである。

椿も似たような現象を見せている。団地の近くの堅田八幡社の麓には、二三年前までは日当たりのよいせいも

あって、どこよりもきれいな花が咲いていたのに、このころ、ほとんど花の姿を見せない。ようやく一輪見つけて、飛ぶ思いで近寄って見ると、まるで虫にでも食われたようで取る気も失くなってしまふ。茶屋鼻のトンネルの裏側もそうである。これも日当たりが良いので、どこよりも早く、いろんな色の花が咲いていたのに、ここも二三年前から花をつけなくなってしまった。

番匠川の堤防も、私にとっては大事な花材を提供してくれる場所である。盆が過ぎて秋風が立ち始めると、何よりも好きな吾亦紅（われもこう）の花が咲き始める。黒味がかつた赤紫の水玉のような花が風にゆれる。花材の主役にはなれないかもしれないが、一枝入れると、秋風がただよう。秋のいけ花には是非ほしい花である。この花も最近では減るばかりである。五六年前までは、自動車教習所の傍、蛇崎の堤防に見事に群生していたが、いまはもう長瀬のグラウンド近くの堤防に細々と生きているだけである。

そういえば、秋の代表ともいえるすすきも減ってきた。頂度穂の出るころに、堤防の草刈りをするのが原因だろう。私は穂が出始めたころに取っておくが、これだとい

つまでたつても散ることがなく、重宝している。

五月の、あの真っ赤な山のつつじも少なくなった。私の近くの山には季節になると、山が燃えるように咲いていたが、宅地の開発が進んで、これも目に見えて少なくなった。ただ嬉しいのは、山栗だけはたっぷりあることである。嬉しいといえは、もう一つある。つるうめもどきがそれである。

随分前のことになるが、中川の川岸のせんだの木にからんだつるうめもどきの一群を見つけ、高い木をもとめせず登って取ったが、これは、その後も毎年美しい実を見せてくれる。そのうえ、今年はその大群を新たに女島入口の川岸に見つけ、今年の暮れを今から楽しみにしている。

イズレノ花カ散ラデ残ルベキ。散ルユエニヨリテ、咲ク頃アレバ珍シキナリ

世阿弥『花伝書』の一節が思われる。

いけ花を始めて花とのつながりができ、それによって自然の移り変わりに興をそえられるのは嬉しいが、その反面、開発という名のもとに、自然の衰亡を身近に感ずるのは、また、複雑な思いにかられるものである。